《仮》魔法少女　風の流星

黒金

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

《仮》魔法少女　風の流星

【Ｎコード】

Ｎ２３２８Ｚ

【作者名】

黒金

【あらすじ】

２つの世界で起こった　運命の大きな火事。取り残された　少年と少女。

２人は成長し、何を求め、何を得るのか・・・。魔法少女　風の流（ス）星（バル）始まります。

プロローグ　重なる炎

炎。

すべてが　炎につつまれた。

きがついたら　おれはいえをでて　あるいた。
炎のなかでもえてる　とおさん　と　かあさんたちにふりかえらずに・・・。
どこへいくのか　なんでいくのか・・・・それすら　わからなかった。

そらはくろくにごっててて　まわりにはすべてのいえが　おもちゃのみたいに　こわれていた。

炎。
それが　すべてだった。

こわれた　いえ　の中から　こえがきこえる。

タスケテ・・・・！　コレヲドカシテクレ・・・・！
タスケテ・・・・！　コノコヲツレテイッテ・・・・！
オイテイカナイデ・・・・！！！
タスケテ　タスケテ　タスケテ　タスケテ
タスケテ　タスケテ　タスケテ　タスケテ
タスケテ　タスケテ　タスケテ　タスケテ　タスケテ　タスケテ
タスケテ　タスケテ　タスケテ　タスケテ

タスケテ　タスケテ

そのすべてを　おれはふりきった。
きこえない・・・ふりをしたんだ。
とおさんとのやくそくをやぶって・・・・。
でも、モウ　オモイダセナイ。

バシャン！

おれはよごれたみずのなかに　たおれた
もう・・・・あるけない。
からだを　あおむけ　にしてそらをみあげた。

くろくにごった　そら。
こんなそらも　いいな・・・・。
もっと、「いろんな」せかいをみてみたいなぁ・・・・。

ドボン・・！

そんなおと　とどうじに　おれは　みずのなかにおちて・・・いった・・・・。

ｉｎスバル・ナカジマ

小さい頃の私は　本当に弱くって泣き虫だった。
小さな悲しいことや辛いことでも蹲って　泣いている事しかできなかった・・・。

１０年前・・・
私がギン姉と一緒に帰ってくる　父さんを空港まで迎えに行った。
家族で一緒にデパートに行って、買い物や食事に行く約束をして・・・。
ギン姉と一緒に　父さんが帰って来るまでアパートで時間をつぶしてた。
でも、その時に私は迷子になった。
平和な時間はスグに消えて・・・絶望の時間がやって来た。

どこか解らない所に行っていると、炎が燃え盛り始めた。
近くにいると思っていた　他の人達はすでに救助されていて、私だけが取り残された。
周りの炎の熱気が私の体力を奪い、ふらふらと火が比較的にないホールまで歩いた。
その時は走れる体力は・・・なかった。

崩れ始める建物が私を飛ばした。
その痛みで私は蹲って泣いてたんだ。
痛かった。痛いのは・・嫌だった。

こんなの・・嫌だ。
痛いのは・・嫌だ。

そう・・・目の前に『あった』黒い水たまりを見るまでは・・・。
その黒い水たまりには赤い髪の男の子が倒れてた。

ミシッ・・ミシッ・・・

後ろで変な音が聞こえた。
けど、振り向かずに、男の子だけを見ていた。

黒い水たまりが何時の間にか消えて
男の子は目を覚まさずに、倒れたまま・・・・。

ドカァァァ・・・！！

後ろで・・大きな音が後ろで聞こえた。
振り返ると、天使の像が・・私の方へ落ちて来た。
綺麗なハズの天使の顔は・・・悪魔の様に、私を見ていた。

そんな時・・・。
私はあの人に・・会った。

天使の像を桃色の帯が巻きついて、落ちるのを止めていた。
その後ろに・・・白いバリアジャケットを身に付けた　天使の様な人・・・。
エース・オブ・エースと呼ばれる『高町なのは』さんが空に浮いていた。

助かった・・・！

私はこの人の嬉しそうで、悲しそうな顔を見て、涙がこぼれそうだった。
なのはさんの「もう　大丈夫」という言葉に意識が失いそうだった・・・！
そして、私にバリアの魔法を使ってからデバイスを天井に向けて・・・放った。
『ディバイン・バスター』。
なのはさんの得意な魔法の１つ。
その魔法は天井を貫いて、空にまで届いた。

私はなのはさんに連れてかれ、空いた天井から地獄の炎のような場所から抜け出して貰った。
炎の中から助けてもらって連れ出してくれた　その広い夜空は　風は冷たくって・・・。
抱きしめてくれる腕が温かくって・・・。
なのはさんの笑顔は凄く綺麗だった。

「エントランスホール内での要救助者・・・女の子1名を救助しました・・・！」

『ありがとうございます！　流石高空魔導師のエース・オブ・エースですね！！』

「西側の救護隊に渡した後　スグに救助活動開始しますね。」

『おねがいします！！』

救助活動・・・？
なのはさんの言葉に、私は思い出した。
私の近くで倒れていた・・男の子の存在を・・・！！

「な、なのは・・さん・・！」

「ん・・？どうしたの？」

「男の子が・・・！まだ・・あそこ・・に・・・！」

「！　わかった。　ちょっと、急ぐよ。」

なのはさんはスピードを上げて、私を救助隊に引き渡した後、スグに戻って行った。
助けてくれた　なのはさんは強くて、優しくて　かっこよくて・・・
泣いているばかりの私は・・自分が情けなくて・・悔しかった・・・・
。
自分に力があれば・・・あの男の子を助けれたのに・・・・！

あの時に・・・私は誓った。心の奥から決めたんだ。
『強くなるんだ』って・・・・。
何も出来なくて、泣いてばかりなのも・・・もう嫌だ！

私は・・・私が守りたいものを守るんだ。
地獄の様な火事から、ギン姉と一緒に体を鍛えた。
今なら男にも力なら負けない自信はある。
ギン姉から『シューティングアーツ』を習った。

『シューティングアーツ』は拳と魔力による体の強化。
でも、私は『足りない』って思ったんだ。
私には『殴る』事しかできない。
そんな思いに悩みながらも、『シューティングアーツ』を習っていた時・・・
私の師となる人、とであった。
その人はある一族の人で　自分の一族の事を『オニ』の一族って言っていた。
一族に伝わる体術の『奥義』だけしか教えてくれず、あとは体を鍛える事だけだった。
そのおかげで　私の体力は　化物　と呼ばれるほどになったんだけど・・・・。
師と別れて　私はスグにミッドチルダに戻り、管理局・陸士訓練校に入った。

そこで、私のパートナーとなる人と会った。

そして、今日・・・。
私達は陸士ランクB試練を受けに来ていた。

シュ！　シュ！

拳が空で鳴る。
その後ろでパートナーのティアナ・ランスター・・・ティアがデバイスの調整をしていた。

「スバル・・・。
いい加減にしないと　試験中にそのオンボロローラーがいかれるわよ。
そうなったら、アンタの突撃力が一気にダウンするんだからね。」

ウッ・・・！
「ティア～・・・！不吉な事言わないでよ・・・！
ちゃんと朝に油も差した！」

準備運動をしながら、デバイスの調子を見る。
私が持つデバイスは2つ。
足に付けているローラーブレード
手に付けてる拳装着型アームドデバイス。
バリアジャケットはローラーの方が作成して、
『プロテクション』などの魔法は手甲で創り出す。
さてと・・・私もデバイスの調整しとこ・・・。

ローラーは・・・

水平対向６気筒４ストローク魔力エンジン
―――ＯＫ
スロットル
―――ＯＫ
サスペンション
―――ＯＫ
魔力伝導率
―――ＯＫ
コモン・コア・ブースター
―――ＯＫ
チャージ・ブースター
―――ＯＫ
バランス力
―――ＯＫ

ん・・。大丈夫だね。
えっと、手甲の方は・・・・。
フィンガーグローブ
―――ＯＫ
カートリッジシステム
―――ＯＫ

「ひび割れ等なし！準備ＯＫ！」

「こっちも、準備ＯＫよ。」

ティアもＯＫみたいだし・・・・。
体を温めておこうかな！

プロローグ　重なる炎（後書き）

この小説は　『魔法少女　幽☆遊☆ティアナ』が詰まった時に思いついたモノです。
なので、ティアナより遅くなると思います。

第1話　試験開始――！

ビー！！

そんな音と共に　１つの画面が出て来た。
画面には制服を着た女性。

『おはようございます！
さて！魔導士試験受験者2名！
そろってますか～？』

「「はい！」」

『それでは確認します！
時空管理局３８６所属の
ティアナ・ランスター二等陸士と・・・』

「はい！」

『同じく３８６所属の
スバル・ナカジマ二等陸士』

「はい！」

『所有している魔導師ランクは陸戦Ｃランク！
本日受験するのは魔導士試験Ｂランクで間違いないですね！』

「間違いありません」

『では、本日試験管を務めさせていただく　リィンフォース・ツヴァイ空曹長　です！
よろしくですよ～！！』

「「よろしくお願いします！！！」」

そう言って、ツヴァイ空曹長は敬礼をして、私とティアも敬礼をした。
この人が・・試験管。
みた感じ　ゆるそうな人・・・。
元気な子供・・？
空曹長はルールの説明を始めた。

『お二人はココからスタートして、　各所に設置されたポイントターゲットを破壊！』

色んな画面から情報を見せてくれる。
破壊するターゲットは赤い●のペットボトルを逆さにしたモノ。
バリアを張ってるみたいだけど　一発殴れば大丈夫かな・・？

『でも、破壊してはいけない　ダミーターゲットもあるので注意してください！』

破壊がダメなのは形は似てるけど蒼い▼！

そして、画面に現れるのは緑の球体。

『妨害攻撃も気を付けて　全てのターゲットを破壊！
制限時間　１５分内にゴールを目指してくださいです！
何か質問はありますか～？』

質問？
私は無いけど・・・
チラっとティアの方を見る。
あ、眼が合った。

「ありません！」

「！　ありません！」

『では　スタートまで後少し・・・
ゴール地点で会いましょう！　ですよ？』

ツヴァイ空曹長の画面が消えて、３つの●がある横長の画面が出て来た。
これがスタートの合図・・！
私とティアはソレを見て瞬間に動けるように構えた。

プーン。
そんな音と同時に１つ、●が消える。

プーン。
最後の１つ・・！
私とティアはもう走れる準備は出来てる！

「レディ・・・！」

ポーン！！！！

「ＧＯ！！！！」

ティアのスピードに合わせて、私もローラーブレードで走り出した！
丁度、前にあるビルがコース。
先輩達の話によると殆どが下に降りてから上って行くらしい。
でも、ティアはビルの屋上の方に鞭の様なモノを打ち出して、魔法で固定する。
私はティアに抱きつく。それを確認すると収縮出来るメジャーの様に一気に登って行った。
あ、そういえば中にもターゲットあるんだっけ・・・。

「ティア！中のターゲットは私が潰してくる！」

「手早くね！」

「ＯＫ！！」

途中で私はティアから離れて、ビルの窓から侵入した！
ガラスは痛いけど、こんなの師匠の投げよりは痛くない！！！
中にいた妨害スフィアが３体！
着地と同時に魔力を通してロードブレードのエンジンを機動させてスピードを出す！
それと同時に　妨害スフィアが攻撃をしてくる。
体をあまり動かさず、最低限の動きで攻撃をかわす！
攻撃を避けながら妨害スフィアに一気に寄って

拳で殴って破壊する。　と同時にスピードに乗って　近くのスフィアを回し蹴りで蹴り飛ばす！

中で一番遠かったスフィアは遠ざかりながら攻撃をしてくるけど、こんな距離、無いようなもの！
でも、あまり行きすぎると戻ると　時間に余裕が無くなるかも。
あまり使いたくないけど、仕方ないよね！

「カートリッジロード！！」

ガシャン！
右手の手甲がカートリッジをロードしてくれる。
それと同時に、ギアが回り出して台風のような球体を創り出す！

「『リボルバー・シュート』！！！！」

ドォォンン・・・！！！

腕から放たれた球体は風を巻き起こしながら妨害スフィアを破壊する。
それを確認して、次のスフィアを破壊にかかる。
下に行きながら途中にあるスフィアとターゲットを殴り蹴りで破壊していく。
こんなスフィアじゃあ、投げる事もできないしね！！
外に出て進んで行くと途中でティアと合流した！
へへへ・・・！流石　ティア！

「良いタイミングだね！ティア！」

「当然！」

「ティア！私に捕まって！　一気に進も！」

「わかった！」

ティアは私の背中に乗るのを確認してから切っていたエンジンを機動させてスピードを一気に上げる！
途中に会った妨害スフィアとターゲットをティアが後ろで撃ち落とす！

ドン・・・！　ドン・・！！

線路の下から１０体程の妨害とターゲットが現れた！
中に破壊がダメなのは・・ない！

「ティア！片手使うよ！」

「解ったわ！スバル！背中貸して！
スグに降りれるようにしておくから！」

「わかった！
カートリッジロード！！」

妨害スフィアから攻撃が来る。
それと同時にティアが私の背中を蹴ってジャンプした！？
ちょっと、それ聞いてないよ！？
私は少しティアの行動に驚いているとティアは正確に空中で妨害スフィアを撃ち落としていく！
ありゃ、心配しすぎたかな・・？

「『リボルバー・シュート』！！！」

私は妨害スフィア達が固まってる所に　リボルバー・シュート　を放つ！

それと同時に、場所を移動してスフィアを殴って破壊する！

さっきのリボルバー・シュートを撃った所には　２体の妨害スフィア！

仕留め切れなかった！

っと思ったら、ティアの攻撃でほぼ同時に破壊された！

「さっすがティア！」

「当然でしょ！

さ！　さっさとターゲットを破壊しましょ？」

アレ？っと思って周りを見渡すと・・・・。

もうターゲットだけになっていた。

ホント・・凄いよティア。

私には苦笑いしながら、ターゲットを殴って破壊していった。

ここにあったターゲットを破壊後、時間短縮のためにティアは私の背中に乗った。

っと言っても、私が両手を背中にまわして、手の所に足をかけてる状態だけどね！

少数なら、私よりティアの方が破壊ができる。

次のターゲットがあるビルに１階から入ると、両脇から、スフィアの攻撃が飛んできた。

ティアはジャンプで避けて、私は屈みこみながら避けた。

攻撃を避けた後、前の方からスフィアが来た。

「ティア！！」

「スバル！アンタは成るべくそいつらを相手にして！
私が援護する！！」

「りょうーかい！」

そのままスフィアとターゲットを破壊しながら、上へ上へと登って
行った！
一旦、ココでわかれて、ティアと私はスフィアを破壊にかかった。

道路の方へ移り、ティアが瓦礫に隠れながら攻撃する。
私はティアの後ろにいるスフィアを1体づつ、殴って破壊していく。
2人で前方後方の安全を確認する。

「よし！全部クリア！
この先はこのまま上にある！
上がったら　一気に集中砲火がくるわ！」

ティアの話を聞きながら、私はカートリッジをセットする。
ティアも話しながら、カートリッジをセットしていた。

「『オプティックハイド』を使ってクロスシフトでスフィアを瞬殺！
やるわよ！」

「了解！」

クロスシフトは作戦の1つ！

ティアのデバイスを囮に私とティアは『オプティックハイド』で姿を隠しす。
囮に集中している間に私は成るべく近くに寄って『リボルバー・シュート』を
ティアは『クロスファイアー・シュート』で攻撃をする。
この時、私は時間差で姿を現して注目させる。

作戦が始まって、私は囮に引っ掛からなかったスフィアを殴り壊す！
カートリッジロードをして『リボルバー・シュート』の準備をする。
スフィアが私に注目している間にティアが『クロスファイアー・シュート』の準備をする・・・！

「『クロスファイヤー・・・！！！
「『リボルバー・・・！！！！
シュート！！！！！』」」

4体のスフィアにぶつかって破壊した！
私は1体しか倒せなかったけど、残りのスフィアはティアが破壊！

「イェイ！　ナイスだよ！ティア！一発で決まったね！！」

「まっ・・・あんだけ時間があればね」

「でも普段はマルチショットの命中率はあんま高くないのに・・・
ティアはやっぱり本番に強いな～！！」

「うっさいわよ！
さっさと片付けて、次に・・・　っ！！」

なんかティアが焦った顔でコッチをみる。
私は振り返ると　スフィアがエネルギーをチャージしていた・・・
！！
クッ！油断した！！？
「スバル！防御！！」
私はスフィアの方にプロテクションを張りながら、ティアの方へ走る！
エンジンを機動させてスピードを上げ、ティアを抱っこして攻撃を避ける。
私が足になれば　ティアは撃つ　事に集中出来る！
ティアは標準をスフィアに狙いを付けて、放った！
バァァン・・・！！
スフィアは音を立てて破壊された。
よかった・・・！
ティアを下ろしてから謝った。
「ゴメン！油断した！」
「まっ・・いいわ。
お互いにケガもしてないしね・・・。
それよりも次は最後は・・・」
最後・・・？
あ、先輩達を苦しめたって言う巨大スフィア！
アレって遠距離攻撃も出来ていて、

先輩達はゴール直前で隠れていたスフィアに攻撃されて脱落したんだった・・・！！

「どうするの？」

「・・・制限時間は・・・あと5分。
アンタのオンボロローラーで一気に駆け抜けても私がターゲットを撃破しても良いけど・・・。」

「へへへ！どうせなら・・・」

「全スフィア、全ターゲットクリアを目指すわよ　スバル！」

「作戦はどうするの？」

私がそう言うと　ティアは少し考えて
デバイスについている時間を見る。
そして、地図を出した。

「先輩達はゴール直前の・・ココ！元道路を走ってる最中に一斉放火された。
恐らく・・ココを走れば難関のスフィアが攻撃をしてくるわ。」

「つまり、その攻撃を辿れば難関のスフィアの所・・・！」

「その通り！
まず、私が『フェイクシルエット』で私達の幻影を走らせる。
幻影には攻撃を避けて貰っている間に・・・」

「私が『ウィングロード』でスフィアへの道を創る！」

「『オプティックハイド』で姿を消してアンタ私を抱えながら一気にビルに突入！」

「一気に攻撃！」

「よし・・・。それじゃあ・・いくわよ　スバル！」

「了解！！」

私達はゴール３００メートル位の所で瓦礫に隠れて周りを確認する。・・・・。ここで攻撃してこない・・・・。ならもうすこりゴール近くってことだね・・・・。

私はティアの方を見ると　ティアは頷いて『フェイクシルエット』で私達の幻影を創り出し、道路に走り出させた。

それを私達はみていると、ゴール１００メートル位　ビルの窓から蒼い攻撃が始まった。

「あそこね！スバル！」

「うん！『ウィングロード』！！！」

隠れている所から遠回りに蒼い道・・・『ウィングロード』がビルの壁を貫いた。

その時、数秒だけ攻撃が止まる。

でも、再び幻影の私達が走り出すと攻撃が始まった。

「まだ気がついてないみたいね・・・！

『オプティックハイド』！！

１０秒で行きなさい！」

「了解！！！」

ティアをおんぶしエンジンを機動させて一気に空に浮かぶ道を進む。
ビルの中に侵入するとスフィアが窓の方を向いて攻撃をしていた。
私はカートリッジをロードしてチャージする。

「一気に行きなさい！」

「うぉぉぉぉ！！！！！」

これが・・・！師匠から見稽古の業！！
本当の技は　振動。
でも、私には出来なかった。
だから、コレが出来たんだ・・・！
師匠に連れて行って貰った本屋で見つけた　本　に乗っていた
この業を・・・！！！

「――　二重の

極み！！！！！」

拳と筋肉に魔力で強化して　一気に巨大スフィアを殴りつける。
ガッガン・・・！！
スフィアは数秒後・・・ピーっという音と白い煙を立てる。
それを見たティアはため息をついた。

「全く・・なんで　魔力も使わない拳が岩とかコレを壊せんのよ。しかも・・コレ、『中身』から破壊してるじゃない・・・」

「へへへ！　凄いでしょ！　師匠から見て学んだ　業だからね！」

「はぁ・・・まぁいいわ。残り時間２分２０秒！
サッサとゴールしに行くわよ。」

「うん！『ウィングロード』！！！」

窓から出した『ウィングロード』をゴールの所まで伸ばす。
そしてカートリッジロードして『コモン・コア・ブースター』を機動させた。
ティアをおんぶして　一気に『ウィングロード』を走る！！！

「『シュートバレット』！！！」

ティアがターゲットを撃破し、そのまま進む！
ブレーキでスピードを落とししつつ、ゴールを目指す！
赤いレーザーのような帯を通り抜けると　そこで待っていた　ツヴァイ空曹長がいた。

「ターゲットオールクリア！　おめでとうございます！」

「「（ちっさ・・・）はい！　ありがとうございます！！」」

「では、試験の結果はまた後ほどお伝えするので・・・
それまではやて二等陸佐　と　フェイト本局執務官から　お話があるようなのでホールに行っていてください！」

フェイト・T・テスタロッサさん・・・。
あの時の火事でギン姉を助けてくれた　執務官！！！
八神はやてさんは確か、父さんの所に来てた人だったっけ？
「「はい！！」」

第2話　機動六課

「っという訳で　スバル・ナカジマ二等陸士　ティアナ・ランスター二等陸士
2人を　結成する『時空管理局本局古代遺物管理部　機動六課』にスカウトに来たんや。」

えっと・・・・。
八神はやて二等陸佐とフェイト・T・ハラオウン本局執務官の話は私達のスカウトだった。
利点として、ティアはフェイト本局執務官に色んな事を聞けて、私には　憧れの　なのはさんの訓練を受ける事ができる。
しかも、父さんから聞いてたけど本局の人達って空戦適正があるエリート集団！
でもそのおかげで　陸から海、空へ行く人達が多くって陸は海、空以上に人材不足だって言ってたなぁ・・・。

《ね、ねぇ！ティア！》

《なによ。スバル。》

《ご、ゴメン！　でも、ティアどうするの・・？
スカウト受ける？》

《・・・・。まだ決めてないけど、試験の結果次第ね。》

ティアは試験の合否しだいかぁ・・・。
そんな時、　私の憧れである高町なのはさんが数枚の紙を持って来た。
え！？　ウソ！！　なのはさんが合否の発表を！！？
「お話の途中良いかな？」
「あぁ　なのはちゃん！　もう試験の結果出来たん？」
「うん。
えっと・・・スバル二等陸士　ティアナ二等陸士。
２人の技術は　合格です。
ティアナ二等陸士は射撃の命中力と判断・・・スバル二等陸士とのコンビネーションと指示の出し方が良かったよ。
体力と　油断が少し有った所が心配だね・・・。
スバル二等陸士は　体力、運動神経は良いです。
でも、少し前に出過ぎたりして　スピードが抑え気味だったのは気になるかな。
２人の役割分担が良く出来ていて最後の難関の巨大スフィアを簡単に崩されたのは驚いたよ。
リィン空曹長との話し合いの結果。
２人ともＢランク合格！　おめでとう！」
や・・・やったぁぁぁぁ！！！！！！！！
《ティア！ティア！やったね！Ｂランク合格だよ！！！》
《スバルうっさい！聞こえてるから静かにしなさい！》

「そっかぁ・・・。
じゃあ、スバル二等陸士　ティアナ二等陸士。
スカウトの件は一週間内に聞かせてくれればええよ。
Bランク合格　おめでとうな。」

「「あ、ありがとうございます！！」」

私達はなのはさん達と分かれた。
ティアも私も無意識に緊張してたみたいで、角を曲がった時に自然とため息が出た。

「やったね！ティア！」

「ホントね。
さて、試験も終わったし、何処行く？」

「ん～・・・。
あ、シロウの所に行ってデバイスとか見て貰うとか！！」

「そうね。
デバイスマイスターの資格もあるし、久々に会うのもいっか・・・。」

うん！うん！！
それじゃあ！決定！！

「で？シロウがどこに所属してるのか　アンタ知ってるの？」

え？
ティアの一言で　私はカチーン！と固まった。

そう言えば、シロウの所属場所って・・・どこだっけ・・・。

「はぁ・・・。
知らないのに行こうとするなんてね・・・
スバル、ちゃんと聞いとかないと　あのバカスパナは言わないわよ。
」

「うぅ・・・。」

「たっく。仕方ないわね・・。」

ティアは画面を出して、連絡を取りだした。
たぶん、シロウにかけてるんだと思うけど・・・。
アレ？ティアって何時の間に　シロウの番号知ってるんだろ？

『コチラ　時空管理局地上本部技術部　シロウ・ゲイズ三等陸士
です。
って・・・ティアナか。　なんかようか・・・？』

「用がないと連絡取っちゃだめなわけ？」

『んな訳ないだろ。ただ、心配になっただけだ。』

「っ！！（この鈍感！また誤解する様な良い方して・・！！）
ま、まぁいいわ！　アンタ今どこにいるのよ。」

『ん？今か。　今は地上訓練施設の技術室にいるぞ？』

えっと、地上訓練施設って　どこだったけ？
チラ、っとティアの方を見るとすこ～し嬉しそうな顔をしてる。

ティアを見る限り近いの・・かな？
なんか赤いようにも見えるけど・・・・。

「ふぅん・・。今から私達そっちに行くから　デバイスのフルメンテの準備お願いね。」

『・・・・いきなりだな。
わかった。父さんに掛けよって使用できるようにしてる。』

「ありがとね。
それじゃあ。」

『ああ。後でな。』

画面からシロウが消えると、地図を出した。
そして、私達が今いる所に指をさす。

「いい？スバル。今私達がいるのはココ。
んで、地上訓練施設は　ココ。」

「あ、意外に近いんだね。」

「そう。丁度いいから、デバイスのフルメンテを頼んじゃったけど。
」

「ふぅん・・・・。なら行こ？
シロウも待ってるだろうしね！」

「そうね。」

一緒にシロウがいる施設に向かい途中でアイス（４段乗せ！！）を買って食べながら行った。
ん～～～！　やっぱり、アイスは良いなぁ・・・！！

訓練施設（？）に行くと　扉の前でシロウとフェイト本局執務官、八神二等陸佐、なのはさんがなんか話してる。

「ティア。なのはさん達、シロウと何話してるんだろ・・？」

「そうね・・・。多分だけど、シロウをスカウトしてるんじゃない？シロウって最少年デバイスマイスターでしょ？」

「ふぅん・・・。じゃあ、シロウとも一緒に働けるんだね！！！ティアはどうするの？」

「行くわ。当分は2人で一人前みたいだしね。」

ティアと二人でシロウとなのはさん達の話が終わるのを待つ事になった。
話しかけるの気まずいし、さっきなのはさん達と会ったし・・・。
どこかに座ろうかとティアと話をしていたら、チラっとシロウの方をみると・・・。
シロウと眼があった。
これって、　まずい？

「スバル！ティアナ！」

「あっちゃぁ～・・・見つかっちゃった。」

「まっ、仕方ないわね。」

2人で少し反省していると　シロウがなのはさん達から離れて私達の所まで来た。
その時に見えたシロウの顔は少しやつれてる・・？

「ナイス！良いタイミングで来てくれたな。」

「どうかしたの？シロウ。」

「ああ。八神二等陸佐が設立する機動六課って言う所へのスカウトなんだけどな。
俺、デバイスマイスターなのに前線に出てほしいって言われてさ・・・。」

シロウが前線！？
あれ？シロウって強かったけ？
魔力ランクがBなのは知ってるけど・・・・。

「ふぅん。シロウって前線で戦えるの？」

「まぁそうだな・・・師匠からは2流どまりって言われてるけど。」

「そういえば、シロウって訓練校の時、私並に射撃上手かったけど・・・。
それでも2流どまり！？」

「いや、射撃と弓術は一流を超えてるって言われてるけど、
ティアナみたいに操作は苦手だな。」

「ふぅん・・・まっ良いけどメンテはちゃんとしなさいよ。」
「ああ　当たり前だ。デバイスのメンテは何時も真剣だ。」
シロウは真剣な顔で私達を見つめる。
うっ・・・。
「なんだ。スバル達と知り合いだったんだね。シロウ君。」
気まずい雰囲気（ある意味でだけど）から解放させてくれたのは
なのはさんだった。
何時の間にか　なのはさん達が私達の所まで来てた・・。
「え、あ、はい。スバルとティアナとは訓練校でよくメンテをして
たんで・・・。」
「なるほどなぁ・・・。
それは　そうとして、シロウ・ゲイズ三等陸士。
どうやろ？スカウトの件は又聞かせてくれればええ。
けど、考えてくれへんかな・・？」
「俺自身が機動六課に行く事は問題ありません。
ですが、隊員をみる限り、前線では2人、2人。デバイスマスター
も1人で十分の筈です。」
「フォワード部隊とシャリオ・フィニーノ一等陸士の事やね。
シャリオ・フィーノ一等陸士は通信主任と兼用して貰う気でいる。
でもな、非常時には通信主任を任せて、シロウ三等陸士には負傷し
たデバイスの調整とかを任せたいんや。
こうすれば、デバイスも通信も上手く回れるしな。

前線なのは、主に機動六課襲撃時の時を考えて、戦闘して貰うかもしれへんのや。」

「・・・。

つまり、通常時では俺は雑用ってところですか・・？

あと、訓練もフォワードと一緒に・・？」

「そんな訳あらへんやろ。

折角の人材を雑用に使わへん。

通常時はシャリオ・・シャーリーの補佐役をして貰う事になるな。

まぁ、訓練は出来ればして貰いたいんやけどね・・・。」

「はぁ・・・。すみません　八神二等陸佐。

少し2人で御話をさせてくれませんか・・・？」

「？　なんや分からへんけど　ええよ。」

シロウと八神二等陸佐はそう言って、施設の中へ入って行った。

残された私達は・・・どうすればいいの・・？

ｉｎシロウ

コツコツコツ・・・。

訓練施設内にある誰も居ない穴場。

そこに俺・・シロウ・ゲイズは格上の八神二等陸佐を連れて来た。

「それで？来ないな誰も居ない場所に連れて来て・・・なんの話や？」

「・・・。父さん・・・レジアス・ゲイズ中将の言葉を持ってきました。」

「！？」

八神二等陸佐は父さんの名を出すと少し警戒するように半歩下がった。

はぁ・・。やっぱり父さんは嫌われてるのかな・・・。

家の中だと姉さんに反抗出来ない人なんだけど。

「『八神はやてを裏で支援をする。しかし、この事は誰にも言ってはならん。』以上です。」

「っ！！？　ど、どいうことや！？」

「すみませんが、俺は父さんから言われてたんです。

『デバイスマイスターとしてスカウトされるであろう』って・・・。

父さんは立場上　本局の人を毛嫌いする必要がある。

でも、『守るべき者』は地上に住む市民。

八神二等陸佐は逸早く事件を解決する組織を作るんですよね？」

「そうや。地上はどうしても行動が遅い・・・。」

「遅い理由は単純明快。地上の隊員を海と空で取っているから。」

「それは仕方あらへん！　次元世界の管理、空からのミッドチルダ事件解決・・。

２つとも大切なことや！！」

八神二等陸佐の言うとおり、確かに大切だ。
人を守るには人でしかできない。
でも・・・それでも・・・・父さんは頑張ってるんだ。
市民の平和を創るために。

「レジアス中将は解ってます。
でも、奪いすぎなんだ。
陸から人材、資金、技術まで奪って・・・・。」

「奪う！？」

「ああ。優秀な魔導師、市民からの税金、デバイス技術と魔法技術。
別に技術だけならいいさ。弱い魔導師を少しでも強くする為の技術なんだからな。
でも、優秀な魔導師を連れて行かれ、犯罪者を運用しても埋まらない　地上の穴。
税金は海が５０％、空は３０％。陸は２０％しか使えないんだ。」

「そんなに・・・・。空と海は陸から取っているんか！？」

知らないのに・・・仕方ないって言ってたのか・・・・。
やっぱり、父さんの言う通り本局の人は数字でしか見てないのか・・・。
俺は少しため息を出して、画面をだした。
陸の人材、資金、犯罪者を使った運用。
陸の全てを八神二等陸佐の前に出した。
八神二等陸佐は出された　画面を食いつくように見つめる。
そして、力が抜けたように座り込んだ。

「・・・・。

私でも・・・ここまでは・・・。」

「レジアス中将がレアスキル持ちが嫌いってのは・・・
レアスキルを持っている事で傲慢になりやすいから。
そういう人達がいると任務や作戦にまで被害が出るんだ。
表ではカリム・グレシアのレアスキルは否定的だけど、ちゃんと対策を練ろうとしてる。」

「まさか・・・。それを知ってる人少ないんとちゃうか・・・!!?」

「知っているのは・・俺とオーリス・ゲイズ三佐・・と後1人はいえない。」

「?言えないってどういう事や・・・。」

「・・・その人は今　脅されて違法研究をしてるから・・・。
でも、その人は本当は優しくて、面白くて良い人なんだ。」

「（確かに脅されてたとしても違法研究は私らには言えへんな・・・）
なるほどな・・・。良く解ったわ。
シロウ三等陸士・・・後でええからレジアス中将に3週間後位にアポを取ってほしいんやけど・・・ええやろうか?」

俺からのアポ・・・。
あ、八神二等陸佐からアポを取れば父さんは反抗的な態度。
でも、俺からの連絡なら・・・。

「解りました。アポは取っておきます。
あと・・・デバイスマイスターとして、機動六課へのスカウト・・

お受けします。」

「（前線はあかんと言うわけやな・・。
まぁ、仕方あらへんかなぁ～・・・。カリムに頼んで騎士を貸してもらうしかあらへんな・・・。）
ありがとうな。あたしも、レジアス中将の話が聞けて良かったわ。」

「俺は自分の父さんの事を話しただけだ。」

「さよか・・・。」

俺はそう言って、先ほどいた玄関前の方へ歩き出した。
次はスバルとティアナだな。
八神二等陸佐も一緒だったけど、何も話さなかった。

「ねぇ！シロウ！　シロウも機動六課のスカウト受けたの？」

「ん？ああ。昇進は興味ないけど、そろそろ俺もコイツらを完成させたいしな。」

俺はそう言ってポケットから黒と白の剣が交差しているペンダントを見せた。
ティアナは　なるほど　っといった顔で俺の方を見て　スバルはあまり興味はなさそうだ。
このデバイスは　俺がマイスターの資格を取ってから少しづつ作って来たアームドデバイス。
１つのアクセサリーに、２つのデバイス。
２つで１つの双剣型アームドデバイスだ。

「名前って確か　管理外世界にある武器の名前だっけ？」

「ああ。こっちの白が『干将』　黒が『莫邪』。」

「シロウのオリジナルなんだよね！その　カンショウ　と　バクヤって！！」

「その代わりにバリアジャケットとか魔法自体入れること出来ないけどな。」

「つまり、そのオリジナルだけに特化してるって事ね。」

「元々、俺は魔法は才能無いみたいだしな・・・。
ベルカ・・・とまでは行かないけど、接近戦を鍛えるしかない。」

「シロウの夢だもんね！『地上の人達の為に戦う』だっけ？」

「ああ。父さんの夢は・・・俺の夢だからな。」

「全く。このバカスパナは・・・。
まぁいいわ。　さっさとフルメンテしてよ。」

ん？ああ、忘れてた。
こんな事ティアナにばれたら、怒鳴られるな・・・。
俺は苦笑いしてティアナとスバルを技術室へ連れて行った。

技術室の前で2人のデバイスを受け取り、部屋に入る。
まずはティアナの『アンカーガン』。
　　アナオセスゥ
俺のレアスキルは　『解　析』。
この能力は俺が見たモノの構造を設計図が頭の中に現れ、どこが負

傷しているのかがわかる。
早速、『アンカーガン』を『アナオセスゥ』で見る。

スライド　――――――――　多少罅われあり
銃身　――――――――――　異常なし
リコイル・スプリング――　異常なし
銃針――――――――――　異常なし
薬室――――――――――　弾丸1発有り、他、異常なし
弾倉――――――――――　異常なし
撃鉄――――――――――　異常なし
トリガー――――――――　異常なし
カートリッジ――――――　異常なし
魔力伝道線――――――――　異常なし
魔力伝導率――――――――　異常なし
バリアジャケット精製――　異常なし
魔力操作サポート――――　少々遅れあり

目立った異常も、負傷も無いな・・・。
これなら、パーツと微調整だけで十分だな。

カチャ、カチャ、　キリキリ・・・。

よし・・・。出来た。
後はティアナ自身が調整できるだろ・・・。
次はスバルだな。
ローラーブレード　から見るか。
　アナオセスゥ　オン。

『解析』開始。

シェル――――――――――多少凹みあり
フレーム――――――――――魔力伝道線に焼き切れる可能性あり。
ウィール――――――――――『フレーム』と繋がる魔力伝道線に異常あり
カコ――――――――――異常なし
バッグル――――――――――異常なし
水平対向６気筒４ストローク魔力エンジン――――――異常なし
スロットル――――――――――異常なし
サスペンション――――――――――異常なし
魔力伝道線――――――――――６５％ダウン　焼き切れる可能性大。
魔力伝導率――――――――――膨大魔力による一時スピードアップ。　７５％ダウン
コモン・コア・ブースター――――――異常なし
チャージ・ブースター――――――異常なし
総合バランス力――――――――異常なし
バリアジャケット精製――――――異常なし
魔力操作サポート――――――――内容量オーバー

ん～・・・やっぱりスバルは結構無茶してるな・・・。
特に魔力伝導系か・・・。
アイツ、魔力と運動神経は良いからな。
どうせ、ふっ飛ばされたりするだろうし、もうちょっと頑丈にするか。
導線はアームドデバイス用：耐熱型。
データを見る限りだと、チャージ・ブースターがあまり使われてな

いな。
よし、ココにカートリッジ仕込んでおくか。
で、ブースターとして使用。
空いた所に防御系魔法を仕込んで・・・。
いや、アイツはビルにぶつかったりするからな・・・。
対物理系の魔法にしておくか。

よし。あとはこれでいいか。
次は手甲型デバイスだな。

物理的ダメージ軽減――――――――２６％ダウン
ギアによるパワーアップ――――――３２％ダウン
魔力伝道線――――――――――――９３％ダウン
魔力伝導率――――――――――――２３％ダウン
魔力操作サポート――――――――――１１％ダウン

おいおい。アイツ、もしかして『二重の極み』を魔力で強化してやったんじゃないだろうな。
確かにアレは岩とか破壊出来る。
デバイスを通せば魔力ダメージを与える事も出来る。
だけど、その分デバイスに負担が掛かるって言ったんだけど・・・
アイツ覚えてないな。
でも、流石　クイントさんのデバイスだな。
これ以上ない位頑丈で、パワー・スピードに特化してる。
さてと、速く直すか。

カチャカチャ・・・キリキリ・・・カチャ。

チラっと、時計を見る。
デバイスを預かってから３時間程経って現在１７時１２分１９秒。

ふむ。
俺はデバイスの代わりに渡しておいた通信用の時計に電話をかけた。

『ハイ。ティアナです。』

「ティアナ　デバイスフルメンテ&修理が終わったから取りに来てくれ。」

『え？　もう出来たの？』

「ああ。と言っても殆どがスバルのデバイスだったけどな。
ティアナのデバイスは殆ど微調整と軽い修理で済んだ。」

『はぁ・・・。わかったわ。　スバル！デバイスのメンテ終わったみたいだから取りに行くわよ！！！』
『えーー！　あと、コレだけ！！！』
『ダーメ！明日も仕事あるんだから！さっさと行くわよ！！』
『チェ・・』
『っと言う訳でスグに行くわ。』

「ああ。それじゃあ、待ってる。」

ｉｎスバル
うぅ・・・！
あと、あと１回やれば落ちるのに――！！！

「何時まで見てんのよ。速く行くわよ。」

そう言ってティアは私の襟首を掴んで歩きだした。
この状態だと私は引っ張られて、色んな人に変な眼で見られながら
技術室へ向かった・・・。
シロウからデバイスを受け取って3人で食事に行った時、妙にティアが赤かったのは不思議だったなぁ～。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2328z/

《仮》魔法少女　風の流星

2012年1月6日19時46分発行